光

（第十二號）

大正十一年六月

◇『經濟』をどう切るか……西田天香
◇雜感……錦織恭道
◇さびしくたふさき……松下生
◇我等すべて印度人なり……鐵治

同人　懺悔報恩の奉仕者
祈願　不二の光明によれる生活
費用　供養されたる淨財

◇托鉢のあさ……三石勝五郎
◇道德的要求の根本的要素さ副次的要素……中桐確太郎
◇懺悔祈禱の人……松下吉衛
◇返照錄……遠近兄姉

一燈園◇宣光社

大正十一年六月十四日印刷納本　大正十一年六月十五日發行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は卽ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し、許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し、歸一の大願に參ぜん。

內外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆俱成㆓就大圓覺㆒

別願　將㆓來世界眞平和㆒

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し、報恩の爲に行乞せん。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脫るゝことを得べき。願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の清規に隨ひ、世諦を成ぜん。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生產業に卽して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

卽ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せん。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天園、文明の隆興も進化の事象も乃至清規戒行も、此の見地よりすれば則ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは箇中の消息、もとより言辭の髣髴し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。

天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して倚自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその清規によりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絕し、以て齊家、治國、平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては卽ち無相不二。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

『經濟』をどう切るか

西田天香

「月給を貰うて働くことは罪惡でせうか」と經濟學專攻の一大學生から問はれたことがあります。私は「そのやうな事どなたが仰しやつてゞすか」と尋ね返しましたら

「ご存知のK博士がです」との返答に、さすがK博士らしいことを仰しやると、衷心より敬意を表しましてすが、其時、問者に對して私のお答した言葉は、次のやうであつたと記憶します。

「それが罪惡であるかどうか知りませんが、私共の現在、行うてる所は、頼まれた事を無報酬でやらせて貰うてるにすぎません。」

この大學生と申すのは、目下一燈園に居られ、許されて同じ大學に同じ學課を修めてゐられるIさんのつれあいの方でトルストイの「我が宗教」の譯者として私の新生涯への轉機には忘れられぬ加藤直士さんの甥に當られるTさんであります。

Iさんは從來志を同じうせるつれあいと「勞學會」を組織され、畢生のいのりを勞働階級解放に置いて居られる方ですが此頃かう言うてゐられます。

「私は卒業後、勞働運動に參加する決心で居ました。是れには献身の努力、決死の覺悟を以てかゝらねばならぬこと勿論です。私のやうに典型的軍人を父とし、餘り丈夫でもない身體の所有者として、かうした經路をとれば、如何に悲慘な運命が前途に待つてゐるか、時々考へないわけではないですが、眞理の爲めには已むを得ないとへソをきめてゐました。しかし、今あるがまゝの勞働運動が、果して最善唯一の行き方かどうか、我が全力全生命を傾注し盡くして悔いのない、それに十分値することであるかどうか、靜かに自問自答しますと、何やら心の奥底に、首肯してくれぬものが影の如く殘されてあるのを感じないわけにいきませんでした。ところが一燈園に參りまして、托鉢の生涯を實驗させて貰ひましたのに

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

健康もすぐれてくる、親の諒解も得られる、それに、これこそ最高の眞理だといふ厳かなさゝやきを内心に聞きますので勞働運動もこの懺悔の生活を中心としなければならんものであるといふ確信を得られましたので、ホッとしました。」

加藤直士さんは世界大戰中英國に居られ、講和會議の模樣まで親しくご覽になつて社會問題宗教問題等種々御研究の上故國への土產として勞資協調基礎案を齎らして歸られたのだと聞いて居ります。先頃同氏に會はせて貰うた折、こんな御感想をお洩らしでした。

「歸來具さに日本の社會を觀察しますのに、あらゆる事に、精神的方面の缺けてゐるのを痛切に感じさせられます。勞働運動の如きも、あれではどういふものでせう……」

私は非常に同感であつたものですから、私共の仲間には可なり研究の積まれてゐる「宣光社」の趣意書やうのものを、お目にかけましたのに、どこか共鳴のふしが、おありだつたと見え、大層賛意を表して下さりました。其の時、私は申しました。

「十幾年前、あなたのお譯しになつたト翁の『我が宗教』を讀まして頂いて、『死ね！　死ぬは生くるなり』の句に行き當り、決死して如實に歩み出さして貰うたのが今の生涯の初まりでした。かく無所有の立場にありましても、有の世界、所有の問題に觸れられぬことはない、否、無所有のあかしを經ての所有の整理でなうては徹底的でないやうに思はれます。この無のあかしを經ての有の整理がつまり宣光社の職分です。」

かやうな次第で、宣光社の職分は、中々重大であり、世相複雜を極めて來るに從つて其のはたらきあらはれ方も單純でなくなるのですが、此處には經濟問題を扱ふ意味に於いて宣光社について述べさせて貰ひませう。

先づ便宜上、私は、經濟的宣光社を三種に分けて居ります。即ち

第一宣光社　といふのは、純粹の淨財を奉仕者が扱ふ場合であります。こゝには權利義務はなく、貸借關係は生ぜず、無償にして惠まれたもの故、神佛の名によつて用ひ又分かてばよいのです。

岡山に大谷製麵株式會社といふのがありますが、これは金光敎の神財と藤井新さん高橋正雄さん以下十數名の奉仕者とで經營されてゐるのです。私の次男なども御奉仕のお手傳をさせて貰うて居ます。次に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

第二宣光社　ですが、これは淨財と奉仕者とを中心とし、之れに、光に向つて歩まんとする資本勞力の結合して成り立つたものです。されば第一宣光社の如く高い調子にはなり切つて居られません。どうしても世間並の經濟の支配を受けぬわけには參りません。殊に對外關係商品取引に於いて然りであります。故に具眼者にあらずんば、外觀上は普通の營利事業と判別することは困難ではありますが、經營を續けてる中に、漸次淨財と奉仕者の領域が擴大されて行くことは爭ひやうのない事實であります。

實例としては、種々因緣あつて私の手に委ねられてゐる秋田縣の田澤鑛業所、栃木縣栃木町で同人松下吉衛氏の社長をしてゐる大日本懷爐灰株式會社、山形縣天童町に於ける同人横田佐八郎氏の經營に係る玉糸工場等を擧げることが出來ます。最後に、

第三宣光社　といふのは全く世間普通の經濟の中に、奉仕者が奉仕する時のことです、この場合には奉仕者の立場を諒解して居る外護者がないと、實驗上、客觀的に能率をあげにくいと同時に、よほど願のハッキリした奉仕者でないかぎり時にミイラ取りがミイラになるやうなことがないでもないやうです。これは同人共深く戒めあつてをる點であります。今栃木縣鹿沼町日本麻糸株式會社工場に奉仕してござる同人伊藤猛氏初め實例は隨所に擧げられます。

以上で經濟的宣光社の大體の解説は終つたのでありますが、次に私自身に扱はして貰うた大阪近くのさる△△工場の整理案について述べさせて頂きます。お光を受けるとき、如何に難解に見える問題も案外容易に片附くものであるといふ一證據とならうかと存ぜられます。

△△工場といふのは拂込株金五十萬圓重役連帶借入金三十萬圓の資金で社長□□□氏が献身的經營に任じてゐるのですが、財界の影響を受け、ホンの少しばかりのさはりの爲めに、六臺運轉すべき紡ぎ器械が大半の準備は整へながらも、たゞ一臺より運轉さすことが出來ないで困つて居つたのです。ある知り人から御依賴を受けまして、何とか心配せよとの話に、私は社長さんのお宅へ上りました。其の時、ご主人は勿論、奥さんも非常に御心配な樣子で神經衰弱にでもお罹りになつてゐらしつたのでせう、大層お顏色も蒼ざめて、佛前に額づいてゐらつしやつたのです。事情餘程急迫してゐることは見てとりましたですが、これまでの經驗上、徹底した併しながら大磐石の整理案といふものは、どういふものか、兎角き

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

いてくれられる方が稀有でありますので、私は最初ご主人にかう申して見たのです。

「私に整理案がないぢやない、併し御實行の意志がおありでなければ、申してもかひがありませんから……」

ご主人は子供が六人もあること、長男の音樂好きなこと、女學校へやつておく娘のかゝりのかゝることなど、家政の内幕までブチまけての困苦談なので、私も、それではと坐り直して、

「では申します。小さい所から出發なされて、工場をこれまでになさるのに、なみならぬ御努力を拂はれたことは、根が商人育ちの私ですから、ようく解つて居り、それ丈、あなたの現在の御境遇に對して御同情申上げますのですが、あなたの生活基調は何と云ふても資本主義においてあつたことは、爭ひやうもない事實でせう。だから、此際、男らしく、たゝかれる丈、資本主義の笞をお受けなさい。決してそれはあなたを殺しません。打ちすゑられ打ちすゑられて、打ちすゑられ盡せば、キツトほーつとします。あなたは、で、三つものをお出しなさい。

第一、謙遜をお出しなさい。この邸宅をお疊みなさつて——つまり社長室から小使部屋へ本當にお入りなさるのです。

第二に、骨董品をお出しなさい。あなたが範を垂れられゝば重役方からも出さすことは困難ではないでせう。そしてその金で、新たにこの會社を買取つて、宣光社的經營に移すのです。

第三、子供さんをお出しなさい。今承れば、長男長女お二人の入費は丁度二萬圓の資本からのうきとくに當つて居るやうです。このお二人だけでも會社の職工として働かせれば、逆に生産者と變るワケです。

かやうにしてご家庭ぐるみ奉仕生活に入れば、ご主人のあなたは、もはや妻子の爲めに何等備へる必要もなくなりますお光りがぢきぢきに誰しもを養つてくれられます。

こゝまで參れば、工場を如何するかといふ經濟問題が解けるばかりでなく、引いて家庭問題子女教育問題人生問題までも、同時に又即時に釋けるのではありますまいか。私は空想を申し上げてるのではありません、私の新生涯で自身親しく實驗させて貰うたことを責任を以て申し上げてるのです」

これは一工場の一整理案に過ぎませんが、應用はどこへでもきく道理でせう。この整理案の精神を以て對しますれば、あらゆる經濟問題が、どうにかして解決の曙光を見出だし得るやうに信ぜられます。これは何も私の創案といふでなく、古今東西の祖師聖賢の道や教には、皆具はつてをりますことですから、何も事新らしく申上げるまでもありません。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

も一つ實例を申上げます。

や、三年ほどにもなりませうか、清水精一さんといふ三十前後の方が飄然一燈園へ私を訪ねておいでになつたことがあります。この方は大阪府三島郡の地主さんのご長男であるさうですが、私共の懺悔の生活をご參考に遊ばして、棄恩入無爲といふ行き方をハッキリ斷行なされて、家を捨て財産を捨て父の怒りにあつても顧みず、大阪市外阿部野なる乞食群に身を投ぜられたのです。働くことを知らない、浪費の悪習に浸り切つた人達を相手に、誤解され侮辱されつゝ、清水さんは懺悔の奉仕を續けてゐられる内に、奇しきお光の力は、警察權を以てして如何ともすることの出來なんだ「乞食退治」を、この無手無所有の奉仕者に成就させられたのであります。昨日まで社會の寄生蟲であつた厄介漢、今日は、同胞相愛を組織の基調とした「働かれない者も平等に養はれる」勞働團體にまで聖化されて來て居るのです。私は、ツイ、先達も清水さんの所を訪づれましたが、氏が身を以て團員を率ゐる謙遜の態度、氏を待つこと慈母に對するが如き團員の敬愛の情を目のあたりにしては、思はず合掌させられました。清水さんは、今は十五代も續いてゐるといふチャン(乞食の頭梁)の娘さんを婚つてゐられます。

神戸貧民窟で使徒の如きいのりの生活を遊ばしてゐられる賀川豐彦さんも、人づてに聞けば、此頃切りに、勞働運動の靈化をお說きになつてゐられるとか。清水さんの御事業などに思ひ比べましても、さうある筈のやうに考へられます。「新しき村」の武者小路さんの近頃御發表なさるものを讀まして貰うて大變感ずる所があつたとて同人の一人が「武者小路さんの藝術もあすこまで行けば宗敎そのものだ」など、言うてゐるのを耳にはさみましたが、何事にしても、いのり――懺悔の生活を中心にせいでは、「地を嗣ぐもの」とはなり得ぬかに思はれます。

社會主義については、專門の智識を缺いてゐますので、よくもわかりませんのですが、若し、それが進化思想の上に立つてゐるものとすれば、究竟のものでないかのやうにとれますが如何いふものでせうか。

私は究竟性をもつたもの、爲めでないと一生懸命になりがひがないやうに考へてをられる人も隨分數多いことと存じます。世の中は一樣にはいかぬ色々異なつた素質の人も居ませう。私は我田引水と思はれましては、本意ないですが、私の信ずる所をありていに言はせて貰へば、社會運動勞働運動如きも、少くとも、そのリーダーたる人に、衷心、懺悔奉仕のいのりがなくては、生命がないものと思ひます。(中桐教授宅に於ける談話　松下生筆記)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

雑感

——天香先生を迎へて——

錦織恭道

福田さん、大塚さん、其他の方々の御配意によりまして、此度山陰の私共が、親しく天香先生の人格に直接し、また私共自身の生活の上に眞面目に考へて見やうとする氣運を惠まれましたことを、先づ深く感謝致します。お別れの折先生から『何か感じたことでもあつたら』との仰せでありましたが、感じた、と云ふほどのことはありませんけれども、若しも餘白でもありましたら、と思ふのでございます。

○『天理さんがお出でだそうですね』と、朴直な村人の一人から聞かれた時、一寸、ヒヤリとさせられました。欲を離れて神様を拜んでさへ居れば、と云ふ簡單な信仰に誤られて、財産を捨て、勞働を怠り、結果、妻子眷屬路頭に迷ふと云つたやうなことになる人を、私の地方では『天理さん』と申します。一燈園の無一物の態度が、單純な田舍人に取つて、先づこの誤られたる天理敎と混同されるのは、まことに止むを得ないことかも知れませぬ。

○『財産をみんな捨てねばならぬと云ふのではないでせう、預つた心持で、最善の途に使つて行くのでさへあれば』『だがその、預つた心持になるためには、まづ一旦全部捨てなければならぬ、捨て切らないものに、本當の意味の預ると云ふことは出來得ない、と仰しやるのではないのですか。それが恐ろしいのです、出來ないのです』『恐ろしい、と思ふ、出來ない、と思ふだけのこと、事實恐ろしいことでも出來ないことでも決してない。そこから出發して正しく眞面目に奉仕を營む時、むしろこれほど安氣な心丈夫な生活はない、と仰しやつてゐるやうです』『少くも天香さん、のやうな擇ばれた人にはさうなんでせう、けれども一般にはとても……。』『その、とてもと云ふ弱い心がいけんのぢやないでせうか』『だつて、みんな弱い心の持主なのですもの。何か餘程の事情に刺戟でもされゝばですが、さもなければ、私共はこの弱い心をどうすることも出來ませぬ。無相の遊歩とか仰しやるのだそうですけれど、矢張り一燈

園生活は意志の生活だと思ひます。結構は結構でせうが、弱く生みつけられた悲しさには屹とつまづかねばなりませぬ。』『つまづかねばならぬと云ふことは、一燈園生活に於て特に云はれることではなくて、弱いものは、どんな形式の生活を營むにしても、つまづくことを免れんでせう。無論私共、死に切ると云つたやうなことは望まれませんが、少くも一燈園生活を目標にして進みたいとだけは祈ります。』『その目標が、本物かどうか、時によると、一種の大なる僞善ではないか、と云つたやうな心持も起ります。』『それは私にも分りませぬ。恐らく、棺を蓋ふて後に定まる問題でせう。だが、本物か僞物かは向ふの事です。どうせ人間ですから、不純なものも交りませう。けれど、木佛であらうが金佛であらうが、要はこちらの態度如何にある譯です。假りに天香さんが僞物であつたにしたところで、私に取つてそれは必ずしも大した問題ではありませぬ、こちらが、本物を拜まうとしてゐるのでさへあれば。』――こんな會話も、交されたのでした。

○『自然に親しみ、懸命に働いてゐなさる農村の方々には、反つて敎へられることが多うございます。都會の生活、現代の文明を飽足らず思ふ私共は、實は貴方々の生活に學ばうとしてゐるのです。しかるに貴方々の中には、却つて都會に憧れ文明の病弊に眩惑しやうとなさる方々がある。惡魔は、貴方々をも段々と恐ろしい世界へ誘はうとしてゐます』と冒頭して、三月二十四日、山陰入りの第一日、村の學校でお話を下さいました。だが、何と云つても田舍の人達は泰平です。滔々たる濁流が近く身に逼つてゐる、むしろすでに其渦中に投ぜられてゐるにも不拘、それが、生活苦と云ふ直接の形を取つて表れない限り、彼等は一向に心配致しませぬ。氣付かないでゐるのです。極少數の人々の外は、恰も巨象の周圍に集まつた盲者の群れの如く、僅にお話の部分々々を聞き齧つたゞけで、肝心な一燈園生活の精神については、殆んど了解するところがなかつたもの、やうでありました。これが大塚さんの豐實村のやうに、村の中心人物が一燈園に親しんでゐなさる關係上、一燈園と云ふものがかねて村民の問題にされてゐるやうな所であればですが、さもない所では、むしろ少數の有志のみに集まつて貰つた方が遙に有意義であつたに違ひない、お疲れの先生に對しても、たしかさうすべきであつたにと、後に至つて、私の心無いやり方を悔いました。――しかし福田さんが『他日これが、屹と何かの御緣にはなりますから』と仰しやたので、少しは、慰むるところもありました。

○彼岸過ぎて、珍らしくも寸餘の雪の積つた二十五日の朝、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

清水岩田兩兄と共に大社へお伴しました。先生は車で、私共は歩いて。さうしたことが、どれだけ先生のお心を痛めましたことやら。何遍か『荷物だけにして、私はどうか歩かして下さい』と仰しやつたけれど、遲くなるのを恐れて、御機嫌の惡いのを無理に乘つて頂きました。車を下りて賽路にさしかゝりなされた時、並木の松の枝から水雪が頻りと降りかゝります。お召物が濡れるのに傘をささうともなさらぬ。『降りますで、傘をおさしになつては?。』『一寸、手が凍えて、傘がさせませぬ。』私は覺えず汗が出ました。見れば、お伴の私は外套に包まれてゐるのに、先生は上に何も召してゐなさらぬのです。さきかた、車に一人お乘せしてお心を痛めた私は、今度は、一人外套にぬくまつて、自分と自分を咎めなければならないのでした。

○參拜紀念に八足門前で、清水さんが私共をカメラに入れやうとなさつた時、掃除男の爺さんが『もし〳〵境内で撮影はなりませぬよ』と咎めました。恐れ入つて止めやうとしますと『だが折角ですから、一寸內證でお撮りなさい、本當はなりませんけど』と云つて與れました。『有難う』と急いでカメラに入れて逃げ樣としますと、今の爺さん、清水さんを呼び止めて『お前さん、代つて貰つてもう一度お撮りなさいお前さん丈はづれちやお氣の毒ですから』と云ふのです。私共は爺さんの口から、この思ひがけない親切な言葉を聞かされた時、どうしてもこの爺さんを、たゞの掃除男と見ることは出來ませんでした。いつのまにか心は幾千年の昔に遡つて、この爺さんこそは、親しく大國主命に仕へまつる何々の命と云ふ、矢張り大昔の神樣であるかのやうな心が致しました。いや、かのやうな話ではない、爺さんのその親切な心がそのまゝ立派な神樣なのだ。しかしそのやうな神心が、決して獨りでに起らう筈はない、爺さんのその神心は、矢張り先生の佛心に映發せしめられたのに違ひない。私は、さう感ぜずにはゐられませんでした。

○大社で思ひ出すのは、二十日、先着の平野龜井兩兄に、參拜旁々托鉢を願はうとして失敗に終つたことです。『仕事はあるが、賃を取らぬと云ふことでは願はれない。規定の一圓四十錢をあげるから、それで食事なり宿泊なりをしてそしてやつて貰ひたい。すべて本省へ報告をしなければならぬのに人を使つた、賃は渡さなかつた、と云ふやうな報告は書けませぬ』とのことであつたそうで、兩兄は退却して歸つて下さいました。『そんな場合、一日賃金を受取つて、そしてその內から最低限の宿泊費を拂つた殘りを、改めてお賽錢にでもあげたらどんなものでせう』とも云つて見ました。しかし『個人としてならばだが、一般團と云ふもの

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

を名乘つてゐる以上、假令お賽錢にあげるにしても、兎も角一日賃金を受取つたこ云ふ事實のために、一燈園の精神が誤り傳へられるやうなことがあつてはと、それを恐れたのです』このお話、御もつこもだこ思ひました。しかしまた『六づかしい談判は措いて、默つてお庭でも掃かして貰へばよかつたのでしたに』こ仰しやつたのにも、いかにもこ頷かれました。――働きもしないで賃を取つてゐる人、の可なり多い世の中に、賃を貰はないで働く、こ云ふここだけが特に問題にされやうこする。可笑しなものだこ、熟々思ひました。

○二十六日の日曜の午前を、ナゼ監獄のあはれな方々に會つて頂けなかつたでせうか――誰にも御縁を結んで頂きたいこ思ふ中にも、わけて監獄の方々にこ思はずにはゐられませぬ、性の問題から身を過つた人達も少くはありますまいが、また物慾の囚はれから迷つて來た人も多からうこ思はれます。せめて一燈園生活の片影なりこも見てゐて下さつたら、あゝした事になられずこもすんだであらうに（素より、私共の罪ではありますが）過ぎ去つたここは兎も角、あゝ云ふ現在の境遇にゐる人達には、屹こ、特に深刻な響きを傳へるに違ひない、こ思つて、前日の夕方、敎務主任の方をお尋ねして見たのでした。こころが『定評のある方ならばですが、天香氏はむしろ問題の人であるやうに存じます。專任の敎誨師の話に對してさへ、本省からは八釜しく云はれる位ですから、ごうも輕々にお願ひするここは出來ませぬ』この仰せ。これが懺悔の生活も讀んで見てゐるこ仰しやる方のお言葉であつて見れば、つまりは、御縁が到らぬものこ諦めるより外ありませんでした。

○ごこへ行つても、大きい內で、高い蒲團で、お茶よお菓子よこ、御馳走攻めにされるのが辛くてなりませぬ。坐談會などの必要から、大きい內も惡いこは申しませんが、たまにはごつか、車屋さんでも、羅宇屋さんでも、もう少し手狹い、もう少しお粗末な、破れ蓆の上で、繩でも綯ひながらこ云つたやうな、火も焚かせて貰ひ、茶碗も洗はして貰へるやうな內で、お世話になれたら、ごんなにか嬉しいでせう。ごうも、こんな立派な內ばかりでは、私の心が落着いて呉れませぬ』こ泌々仰しやつた時、本當にごうしたらよいのかこ思ひました。せめて一晩だけなりこ、思つて俄に尋ねても見ましたが、種々な都合で、こう／＼思召に添うここが出來ませんでした。――こんなここも、もう少し以前から考へておけばよかつたでせうに、すべてはお光任せで、ごうにかなるだらうこ呑ん氣に構へてゐたここが間違つてゐました。お光任せこ云ふここは人事を盡しての

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

上のことである。それを、何事も無考に投げやつておいてそしてお光のお指圖をあてにしやうとした私は、何と云ふ愚な人間であつたでせう。私は、全く申譯ない氣が致します。

○佐々木さんの、今年十五になる英子さんと云ふのが、福田さんが自分で御飯を盛らうとなさるのを『私が盛らせて頂きます、手があいてゐますから』と云つてお給仕をされました無邪氣に洩れた『手があいてゐますから』の一語、それが、敏感な福田さんの耳にどれだけ強く響いたことでせう。頻りに獨り頷いてお出でゞしたが、次にまた、その英子さんがお給仕をなさらうとした時、福田さんはそれを斷つて今度は強いて自分でお盛りになりました、そして仰しやいました『手があいてゐますから』と。餘り鮮かな福田さんの報復ぶりに英子さんもニツコリ笑はれました。私もニツコリ笑ひました。しかし私は、たゞ無邪氣に笑つてはすまされませんでした。母衣の學校でお話の濟みました時も、皆さん殘らず手傳つて後片付けをなさいましたのに、私は、一人ボカンとそれを見物してゐたのでした。いつも手があいてる癖に、容易にその手を働かさうとしない、袴の上に手を束ねて、呆然として空しく過ごすことが多い。と思ふと、英子さんに對しても、穴があつたら入りたいやうな氣がしました。

○菅田の部落を訪ふて十二時頃清原さんへ歸つた時、皆さん恰度お食事中でした。『あなた御飯を』と仰しやつたけれど『えゝ、もう了ひました』と僞りました。そしてとう〳〵お晝は食べませんでした。馬鹿な遠慮をしたものだ、ナゼかうも自分はすなほでないだらう、これが自分の内であつたら、とても一飯を飛ばすやうな辛抱強い男ではない、矢張り私は他人氣が多いのだ、それだけまだ自分と云ふものを持つてゐるのだ、他人の内で遠慮をするだけは、自分の内を開放することもようしないにきまつてゐる、人のものを惜しむのではない、矢張り自分自らを惜しむのだ、と思ふと、つく〴〵自分の小さい囚はれた心が情けなくなります。しかし、さうした遠慮の中には、百丈禪師の所謂一日作さゞればの意味も餘程手傳つてゐます。他の方々はそれ〴〵懸命に働いてゐなさるけれど、私は殆んど何事もしてゐない、無意味に立つたり坐つたりして誤魔化してゐる、見てゐる人は誤魔化せても、自分自らを誤魔化すことは出來ない、何事もしないで、そしてお呼ばれすると云ふことは、何ぼう心が咎めてなりませぬ。佐々木で夕御飯を呼ばれた時も、鯛の煮付けを一皿だけ殘しました、折角の御馳走を殘すのは失禮である、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

下さるお方も滿足なのだ、と承知しながらも、自分は他の方々と同じに呼ばれる資格のないものだと思ふと、こう〳〵お箸が着けられなかつたのでした。――私はこれを單に愚な遠慮だとのみは思ひませぬ。しかし、私の内でも、**三度々々これだけの遠慮を以て食膳に對ふとよいのですけれど。「二つには已れが德行の全缺を量つて供に應ず」**との五觀の文も、今は殆んど日に忘れやうとしてゐます。

○二十七日、福田さんでは、お臺所一切を、中村さんと岩田さんとに投げ出してお頼みになり、献立てから料理から配膳からながしから、すつくりお二人の女性のお手になつたと承ります。後で中村さんが仰しやつたそうです『今度のお伴で一番愉快に嬉しかつたことは、福田さんで、お臺所を全部お任せ下さつたことでした』と。さうでせう、どこへ行つてもお客樣扱ひ他人扱ひにされやうとするのに、すべてを投げ出してと云ふことは、眞に垣を取去つた心からでなくては出來ないこと、そのやうな心を以て迎へられる時、どこへ行つても、そのまゝ自分の内だと云ふ、心安さ、落着き、が與へられることでせう。

○『かうやつてあつちこつち致しますのも、決して呑ん氣に飛び回つてゐる譯ではありませぬ。多くは、血の出るやうな問題について御相談に預からして頂いてゐます。今晩も、何か眞劍の問題でお尋ね下さるのでしたら、夜を明かしても構へませぬ。が、假定的な御質問でしたら、またの暇な折にして頂きたいと思ひます』と、二十八日の晩、石田さんで仰しやつた時、私は覺えずゾッとしました。それは、**當夜の坐談會の緊張味と云ふよりは、むしろ私自身の態度を反省してのことです。**「懺悔の生活」を讀んで譯もなく泣かされた私は福田さんのお指圖を受けて、松江と今市の御講演のことに聊か心配をしては頂いたものゝ、それは、物慾に囚はれた今の世の人達に、尊い一燈園生活の消息を伺はしめたいものであると云ふ、云はゞ、人のためにお願ひしたことであつて、全く私自らの嚴肅な反省、痛烈な要求に基いてのことではなかつたのでした。從つて、私の態度は眞劍味を缺いでゐます。何だか、先生を擔いでゐるかのやうな氣も致します。こんな輕卒な態度で、まあ、よくも先生を迎へられたことだと思ひました。

○二十九日、秦聯隊長新少佐等の切なる要求に應じて濱田へお越しになりました。私にも行かないかと仰せ下さいましたけれど『お伴したいのは山々ですが、私の參りますのを喜ばないものもありますので』と斷りました。先生は、一寸分らない、と云つたお顏をなさいました。その筈、私には老ひたる父があります。父は、私がこのやうなことに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

バタ〱することを好みませぬ、つまり、了解して呉れませんのです。先生が私の寺にお泊り下さいました時も、離れに寢てゐたまゝお目にもかゝりませんでした。お歸りの時『老僧樣によろしく』と仰せられて、私は御挨拶に困りました。しかし、老僧が了解して呉れぬのは、むしろ呉れないのが當然なのです。なぜつて、先生を迎へやう、一燈園を紹介しやうとしてゐる肝心な私自身の生活が、實はそれを裏切つてゐるからたまりませぬ。自ら一燈園に背いてをりながら、これを老僧に了解せしめやうと思ふのは無理な話です。また、老僧にさへも了解せしめる力のないものが、進んで世間へ紹介しやうなど云ふことも亂暴な話です。後でさう思ひました、濱田まで附いて行かなかつたでこそ。私等のやうなものが先生に附き纏ふと云ふことは、むしろ人をして一燈園を誤らしむる所以である。私は、地方の人々に一燈園を紹介しやうと希ふ前に、先づ自らの生活の上に一燈園を現じなければならなかつたのだ、老僧が了解して呉れる呉れないの問題ではない。私自ら、もつと了解しなければならないのだ。體得しなければならなかつたのだ、と。

○三十日午前、今市で愈々お別れの時『錦織さんには、色々法財を使はしてあげて濟まなかつた、勿體ない』と仰しやつて、保さんに命じて、包んだものを下さいました。まあどうしたらいゝでせう。私からと云つては別にお禮も申上げず、そして却つて先生から頂く、そんなことが出來ることでせうか。頂くことは頂きましたけれど、頂いたでは落着きませぬ何かでそれをお返ししなければならない。どうしてお返ししたらいゝだらう。いや、私は更にもつと〱大きいお返しをしなければならぬものがある。お金なんかのことはどうでもいゝ。私自らがお光の體現に努むること、それ以上に、またそれ以外にお氣に召すお返しは何物もない。だが、そのお光の體現、安逸虛僞因襲に充ちた寺院生活に即してのお光の體現、あゝ、私はそれをどうしたらいゝでせう。時によると、飛び出して見たい心も起ります。しかしそれが、眞實の意味の棄恩入無爲であるならばだけれど、現實の、思はしからぬ環境から逃れて、そして一燈園と云ふ所に、一つの避難所安息所を求めるのであつてはたまらない。一燈園に依つての托鉢生活は、私共の今の生活よりはむしろ容易なものかも知れない。或は卑怯な墮落したものである場合さへあるかも知れない。一燈園を離れて、私共の今の生活のまゝにお光に養はれて行くこと、それが、貴くもあり六つかしくもある。他人の便所の掃除は容易でも、自分と自分の内を何時も綺麗にしておくことは

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

却つて難い。私は、鹿ヶ谷の一燈園へ行つて見たい、入樣の家で托鉢をやらして貰ひたいと祈る前に、朝、もう少し早く起きること、御飯を、もう少しひかへること、庭でも掃くこと、老僧の肩でも叩くこと、そんなことから先づ始めなくてはならない。今の生活のまゝに一燈園を現ずるこ

三、私の内にゐながら托鉢をやること、さうだ、道は近きにあり、直心是道場であらねばならぬ。と思つた時、私は、私の今後の歩み方、將來の態度を考慮する前に、先づ即今、私の手と足とを働かさねばならぬことの多いのに目覺めねばならないのでした。——かやうに考へて來ましたことゝ、そして今茲に、こんな閑文字を弄してゐることゝの間に、苦い矛盾を感ぜずにはゐられませぬ。おゝ弱き子よ。私は、何よりも先づ、私の弱い姿の上に、哀愍の涙を禁じ得ないものであります。

○天香先生。私のこの雜感が、全く『弱い者の泣き言』で終らうとしました時、友の一人が、極めて嬉しい消息を聞かせて呉れたことを喜びます。それは、四纏村の岸榮さんについてゞあります。岸さんは生來眞面目な人格の方で現在は遙堪村の先生でゐらつしやいます。「懺悔の生活」を御用達しました折、『出來るだけ早く讀みたいと思つてゐましたけれど晝は校務に追はれ、歸れば家事に忙殺され、殊に此頃はコナシ最中で、歸りますとすぐ冷い汚れた作業服に着替へて、土烟の立つ眞中へ入らなければなりませず、朝は五時から七時まで稻コギと云ふ有樣。凡てに於て貧弱なものは、讀書の時間さへ奪はれ勝でなりませぬ……』。『岸樣、いゝ もうお讀みなさるには及びませぬ。貴方がそのまゝ西**田天香氏で、**あなたの生活がそのまゝ**懺悔の生活です。**學校の事と家の事とのみに追はれてゐなさるとしても、その結果、即ち俸給や一家の收入を、一身の享樂一家の幸福のために私しなさるのでなく、自他一體感に立つてこれを最善の途に使つてお出でなさるのでさへあれば、必ずしも街頭に出でゝ、直接他人のために奉仕なさらずとも、貴方の今日の御生活が、そのまゝ天香氏の精神に背かないことゝ信じます……岸樣、憐んで下さい、私が炬燵に寄りながらこの手紙を認めました間に、貴方は、二十か三十の稻をコギなさつたこと、察します。私の此手紙が單にいたづらな敍述に過ぎないのに反して、貴方の三十の稻は、宇宙にそれだけの生産を増し、人類にそれだけの幸福を進めてゐることを否むことは出來ませぬ。』こんな手紙の遣り取りをしたことのある岸さんの內へ、二十九日、龜井清水兩兄に托鉢に行つて頂いたのでした。ところが、龜井さんが便所の掃除をしやうとて、小便壺の中に手を入れて、繩切れか何

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

かで、小便のコガリをゴシ〳〵おやりになつたそうです。『まあ、さうまでして頂かんでも、大概でよろしうございます。』『仕事を急ぎませんで、出來るだけ丁寧にやらして頂きます。』この『仕事を急ぎませんで、出來るだけ丁寧に……』の一語、そしてその背景に、小便コガリをゴシ〳〵やつてゐなさる龜井さんの眞摯な態度、それには、流石の岸さんも、打たれずにはゐられなかつたとのこと。『懺悔の生活を讀んだゞけでは、アルコール漬の標本を見てゐるやうなものでした。龜井さん達の眞摯な托鉢振りを見て、はじめて、直接、活きた天香さんに觸れたやうな感じが致しました。』この『活きた天香さん』は、岸さんの、單に心の上に感激を與へたばかりでなく、更に、その生活の上にまで直接の響きを及ぼさずにはゐませんでした。『岸さんの內へは、月六日の肥汲男も來なくなりました。大字小山では綿服主義の實行が誓はれ、庚子會の折には、會員自身が早く集まつて、掃除をしたり、御馳走を造つたりすることになりました。遙堪の學校では小便の仕事が餘程減つたと云ふことです』と、友の一人は聞かせて吳れました。

○同じ天香先生ですけれど、弱いものには弱く響きます。強いものには強く響きます。強い響きを受けた人が、隨分、まだ外にもあることゝ信じます。（五、六）

本號表紙の題字は、かの百萬塔の無垢淨光陀羅尼摺本中より頂きました。これは天平寶字八年（西紀七六四）恵美押勝の亂、平ぎました時、孝謙天皇弘願を發したまひ、勅して一百萬基の小木塔（高各四寸五分、基徑三寸五分）を作らしめ、無垢淨光經の四種の陀羅尼を、竪一寸八分許なる卷子本形の黃麻紙に木版印刷し、その中に納めて、之を大安、元興、興福、藥師、東大、西大、法隆（以上奈良）、四天王（攝津）、崇福（近江）、弘福（大和）の十大寺に、各十萬基宛を分配せしめたまひたもので、功畢つたのが神護景雲四年（西紀七六九）四月、實に世界最古の現存印刷物と稱せられてをります。本號所揭は法隆寺にありしものゝ一つで、山口宗義氏の珍藏より擴大したものであります。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

さびしくたふとさ

松下生

まちあぐみしせうそこなれば
いくたび、よみかへしつるぞ！

されど、そはあまりにかなしきしらせにてありし。

『つゆやはなはなやつゆなるあきくれば
のはらにさきてかぜにちるらむ』
また、きみのたまはく
『たびねするゆめのなかにもちるはなの
さむるまくらにあらしふくなり』
なにゆへのなげきぞ？
われはきにかゝりてならず。

いま、きみ、いづちにおはす？
せうそこのけしいんに
Sのかしらもじ！ほのかによまれしは
なによりこゝろうれしかりき、
きみ、みやこちかくまでたごりきしこしればなり。
まもるものなきたゞひとりなるたくはつのはつたびぢ！

きみがさがのやさしきと
きみがつよからぬからだとをおもひ
わがあつきいのりはいまにつゞくなり。

しんにあひたし！

『えたるものは、くをげんず。』
あひかたりて、なげきを
わがかたにわかちおはせよ！
われはそをよろこぶものなり。

げに、はらからはすくなし、
ひとおほきなかに、はらからはすくなし。
たふときはらから！
きみをもつわれはめぐまれたるかな。
されど、よに、はらからとなりて
へだたりゐるはまたなくさびし。
いまぞこのさびしさをしり
いのりのこゝろいよゝせつなるものあり。

おゝ、さびしくたふときはらから！

——むさしの玄光舎にて——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

『我等すべて印度人なり』

―ガンディー氏のことども―

鐵治

『我等凡てギリシヤ人なり。我等の法律、我等の文學、我等の宗教、我等の藝術は、凡てその根源をギリシヤに發す。ギリシヤにしてなかりせば、ローマは……その武動を世界に輝かすを得ざりしならむ。而して我等は、今尙ほ蠻人として、偶像信者として生存したりしならむ。……………』

右は今を去る約百年前、西曆一八二一年の初頭、ヨーロツパの天地は國民主義的覺醒の氣運漸く熟し、久しく外來權力の下に屈服したりし南ヨーロツパ諸民族が、中世紀以來の惰眠を破つて、猛然蹶起、强健の桎梏を脫却せんと一大飛躍を試みつゝありし折しも、故國を逐はれし薄幸天才バーシー●ビツシー●シエレーが、ギリシヤ獨立の飛檄に接して、その雄渾瑰麗なる詩筆を走せて綴つた抒情詩劇『ヘラス』の序文の一節である。『我等凡てギリシヤ人なり！』この告白が、神聖同盟全盛期に於て、しかも土地は累々たる廢墟と化し、民は外夷の鐵鎖に囚はるゝこと十數世紀、獨立の烽火纔かにバルカンの一角に點ぜられた時、『イスラムの叛逆』に來るべき世紀の苦悶を豫言したる詩人によつてなされたることを思へば、吾人は何故に今の時に於て、『我等凡て印度人なり』と表白するの勇なきかを怪しむのである。『愛』と『正義』とを讃へし青年鬼才が、有爲の一生をレグホーン灣頭の藻屑と化してより今や一世紀は經た。しかも、囚はれたるプロメシウスの放たるゝ日は何時であらうか。吾人の魂は遂に飽くなきの憧憬の蝕むところとなつて、空しく『孤獨の靈』を山巓水涯の一隅に埋沒し去るべきか。斯く思ふ毎に吾人は密かに、吾人の胸中に繰返すのである。……『我等凡て印度人なり』と。印度を思ふことは、少くとも吾人にとつては力であり、熱である。如何となれば、そこには、全世界を風靡席捲しつゝある西洋文明に對して、敢然身を挺して拮抗せんとせる快男兒、モバ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

ンダス・カラムチャンド・ガンディー氏が居るからである。
ガンディー氏が、イギリス領印度帝國に於ていかなる地位を占むるか、國際政局に對して氏の主唱せる非暴力・非協同運動がいかなる關係を有するか、將た又印度國内の政情等につきては、吾人は大した興味を抱かない。玆には唯、**氏が提唱せるサチアグラハ（眞理の把持）運動に對する、**一東洋人としての滿腔の同情を表すれば足りる。

由來、西洋文明が人間の虐待に終始し、人間性に背反せるは、吾人の夙に嫌厭の情に耐へざる所であつて、殊に其の、やゝもすれば人間の高尚なる半面を器械視する如き傾向に至りては、實に吾人の憤懣をすら呼ぶものがある。西洋民族は人間を知らないのであらうか。彼等は、自分自らを侮辱して平氣で居るのであらうか。近世初頭、學藝復興期に當つて、『人間性解放』が叫ばれたのは、果してその間の消息を語るものであらうか。現代の世界に於て、印度國民運動の指導者たるガンディー氏ほど、普ねく喧傳されてゐるものはない。物質文明の精華を誇る北アメリカの出版界の如きは、凡ゆる手段を盡して、ガンディー氏に關する報道を蒐集せんと努めつゝあるの狀あり、恐らく從來ガンディー氏について書かれたもの、數倍の記事が、最近數ケ月間に於て、北アメリカ新聞雜誌に發表された位である。しかも、それらの記事が、一もガンディー氏の核心に觸るゝところなきは何故であらうか。去る二月の隔週評論誌上に現れたオッドワイヤ氏の記事の如きは、ガンディー氏を**目して默過すべからざる國事犯人なりとし、最も峻酷なる罪を以て之を糺彈すべき**旨を高唱して居たが、斯くの如きはアングロ・サクソン民族の心理を遺憾なく曝露したものと云へる。ガンディー氏に對して、最も同情あり、理解ありと稱する西洋の批評家にしても、徒らに氏を一個の聖者乃至神秘主義者と呼んで敬遠するの外は、何等剴切の言辭を知らないのである。

玆に吾人が敢て『我等凡て印度人なり』と斷言して、ガンディー氏に對して一片思慕の情を寄せんとするは、氏と吾人との間に一脈否定し得ざる共通點あるを感ずるのみならず、全印度の民衆によつてマハートマとして歸依渴仰せられつゝあるガンディー氏が、一箇の人間、殊に東方印度に生れ、梵唄と苦行とに心膽を練磨し、西洋文明の粹を味得しつゝも、しかも『私はアメリカから學ぶところはない』と昂然渴破して憚らざる快男兒であるからである。

氏は、印度デリーのアラハマバードの近くに生れ、家庭

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

は印度上流階級に屬し、父は曾て土民諸王の一人の朝廷に仕へて、宰相の位にあつた人であるといふ。ガンディー氏は、夙にイギリスのロンドン大學に遊んで、卒業後辯護士の資格を得て歸國し、印度人辯護士中でも錚々たる名聲を博して居つた。然るに玆にガンディー氏が、虐げられたる人類の擁護者として天稟の資性を發揮し、東方文化の爲めに萬丈の氣焰を吐露すべき時期が來た。即ち、氏は業務上の用件で南アフリカのケープタウンに赴いた。その時、氏がイギリス領殖民地の白人から受けた待遇こそ、やがて彼が、今日凡ゆる『文明』に對して否定と彈劾との態度を執るに至つた重要なる端緒であつた。當時、氏はロンドンで第一流の教育を受けた紳士として、いかなるイギリス人にも劣らない識見と人格とは持つて居つた。唯、印度の狀態が未だ發達しないばかりに、本國政府では、劣弱者として印度人を取扱ふのであるとのみ信じて居つた。然るに南アフリカに到着後、氏が汽車に乘らんとした際、一等切符を買つて一等車に乘つたのであるにもかゝはらず、一群のイギリス人が殺到して、氏を車外に突出して、手荷物携帶品をもプラットホームへ投出して仕舞つた。其後彼はトランスヴアールでも、乘合馬車で同樣な目に遭つた。しかもその時は、面部を毆打された程であつた。周圍には、イギリス人の旅客も大勢居つたが、誰一人暴行者を捕へようともしなかつた。熱血男兒ガンディー氏は何條默して止むことができよう、所用終つて後、氏は南アフリカ在住の印度人を糾合して、一大運動を開始したのであつた。印度人子弟の爲めに學校を起し、新聞を發行し、其他各種の社會事業を發起して、あくまで印度人の地位の向上の爲めに努めたのであつた。

其後ガンディー氏は、妻子を南アフリカに伴れて來る爲め歸國したが、其際に、南アフリカ在住印度人の慘狀を訴へて、大に公衆の援助を喚起しようと試みた。是に於て南アフリカ在住のイギリス人は、斷然、氏の運動に反對することになり、氏はナタールのダーバン市に於て、『立派な白人市民』達の爲めに、殆んど半殺しにされんとしたのであつた。僅かにその時通り合せた一イギリス婦人が、暴行者を抑へて、ガンディー氏の腕を執つて、その日傘で氏を庇護しながら、折よく附近にあつた警察署まで伴うたのであつた。イギリス領南アフリカの本國人が、有色人種に對する輕蔑不遜の態度は、人のよく知るところである。印度の上流階級に屬するガンディー氏ですら、イギリス國民の爲めに斯くの如き差別待遇を受けたのである。氏が、爾後一身を放棄して、南アフリカ在住の印度人の爲めに奔走運動

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

し、それが爲めに獄に投ぜらること前後三回、しかも毅然として人類平等の信念を失はなかつたのは、故なきことではない。玆に注意すべきは、當時氏の運動の目的としたところは、本國政府乃至本國人に對する反抗ではなかつたことである。**氏の指すところは、もつと深いところ、即ち人間の惨虐性そのもの、絶滅を期するにあつた。**悪意は、ガンディー氏の辭書には許容すべからざる文字であつた。氏は、善の力を以て、悪を融解抹殺し去らうとしたのであつた。『消極的抵抗』とは、當時、氏が人種無差別運動の標語として用ひた言葉であつた。曰く、

『私は消極的抵抗といふ言葉は好きではない。その言葉では、私が意味して居ることを充分云ひ盡してゐない。そんな言葉は、唯、一箇の手段を示すのみで、私が考へて居ることの一部分にしか當らない。それでは全體が何であるかは知る由もない。眞の美はしさ、それが私の目指すところであるが、それは悪に對して善をなすことにある。だが、目下私があんな言葉を使用してゐるのは、その言葉がよく知られて居るし、且わかりよいからであつて、それに印度人の大多數がさういふ觀念しか把持し得ないからである。私としては、グジヤラチ伽陀や、山上の垂訓などの根本思想で以つて、全人生を革命すべきであると思つて居る。』

ガンディー氏が、人間といふものをいかに尊んだか、凡ての人間の絶對平等をいかに信じて居つたかは、氏が南アフリカ**滞在中、當時未だ十二三歳であつた自分の娘と、日**常一所に嬉戯して居つたものが、醜業婦であつたことによつてもわかる。斯くの如きことは、相當の地位にある西洋人であつたならば、到底出來ないことであつた。しかしながらガンディー氏にして見れば、子女といふものは、一度心底から兩親を信頼し尊敬するやうになつたならば、その環境や交友の悪影響などは受けるものではないので、些の不安の念をも抱くに及ばなかつたのである。其他、男の子供達でも、皆、トランスヴアールでも仕方のないやうな人物と平氣で交際させて居つたのであつた。斯くまで氏が相手の善意を信用して、自分の子女に對してさへ平等の地位に立つて接した結果は、果して成功したのであつた。

或る時氏は、氏を訪問した一アメリカ人に向つて、氏が『眞理（サチヤグ）の把持（ラハ）』なる觀念を、いかにして悟つたかを語つたことがあつた。その話によれば、氏の少年時代に、當時十二歳であつた氏の兄君が金を借りたことがあつた。兄君はそ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

の金の返濟に窮して、ガンディー氏に相談をした。而して、自分の持つて居た腕輪の下側を少し削り取つて、市場に來る金貸に賣り、その金で借金を返すことにした。その計畫は、兩親にも發見されず首尾よく行つたが、翌日になるとガンディー氏は良心の苛責に耐へず、遂に決心して父君に一伍一什を打開けた。之を聞いた父親は、愛兒の大それた行爲を非常に哀しんで、ガンディー氏を特に一室に呼んで懇々と說諭するところがあつた。且、これからは一生涯、苟しくも眞理に悖離した言行はせぬといふ嚴重なる誓言をさせたのであつた。この事が氏の幼心にいかに深い感銘を與へたかは、それから今日に至るまで、一度もその誓言を破つたことがないと氏自ら云つて居るのでもわかるであらう。氏は辯護士として法廷に立つた時などでも、依賴人に於て少しでも虛僞の點があれば、即座に退廷して辯護を謝絕した位であつた。氏の事務所へ依賴人が來るときは、豫め依賴人に對して、もし一點でもこちらに非理なところがあつたならば、直ちに辯護を中止するといふ條件を附して辯護を引受けたといはれて居る。己を持することと斯くの如く峻嚴酷烈であるにもかゝはらず、他人に接する場合には氏は實に寬容にして、度量の大なること海の如きものがある。氏は貸金の催促をしたことがないといふ。それは、相手方の正直の心に絕對の信用を置いて居るからである。一九〇八年の頃、氏は或る狂信家のパタン人に襲擊されて、殆んど生命を失ふところであつたが、しかも、斷然その男を告訴しなかつた。氏はその際、飽くまで自分の愛の力を信じて居つた。而して、愛によつて相手を感化することが出來ると云つて疑はなかつた。果せる哉、翌年その男がトランスヴアールの法律に觸れて印度に送還せらるゝ際、ガンディー氏の許に一書を送つて、今後全力を盡して氏の後援をする旨を言明したさうである。ガンディー氏の謙讓の態度を知るには、次の出來事を味へばよい。南アフリカ在住中、第二回目に入獄した時、或る日看守の一人が來て、便所掃除をするから二人程雜役夫を出してくれと賴んで行つたことがあつた。その時の事を語つて、ガンディー氏は斯う云つて居る。

『そんな仕事は自分でするに如くはないと思つたので、私はその人に、私がしてやらうと答へてやつた。私は別に大していやではなかつた。却つて私は、そんな仕事には馴れてゐなくてはならないと思つた位であつた。』

西洋人でガンディー氏を批評する人々は、やゝともすれば、氏の政策の一大弱點として、その高邁なる理想を實現

するとその不可能なること、少くとも現在の印度に於ては困難なることを說いて、非協同運動の盟友たるマホメット教徒の實際的直接行動を一層有力な手段と見る傾向がある然しながら少くとも吾人は、ガンディー氏の最近入獄まで**の行動は、それ自身で價値あるものと見做したいのである。**

ガンディー氏は、決してイギリス政府の一部人士が信ずる如き法王ではない。奇蹟を演じて人心を收攬する如き第二義的行動に甘んじて居る人物ではない。偶々ガンディー氏の使用する國語が英語である爲め、英語の語義で氏の言葉が解釋され、その結果思はざる誤りを釀し易いのであると思ふ。かの非暴力主義の如き、吾人は不幸にして其の原語たる『アヒムサ』の意義を解し得ないけれども、必ずや、ノン・ヴァイオレンス以上の深遠なる內容を有することを疑はないのである。それらの微妙なる內容を有する抽象語が、西洋人には到底理解され得ざることは、西洋文化の一大缺陷に胚胎して居るのであつて、從てガンディー氏自身に對する觀照も、それが爲めに不徹底となるを免れないのである。卒直に云へば、西洋に於ては道義は一個の手段であつて目的ではない。彼等にとつては、懺悔滅罪の如き行爲は何等實際的價値なき閑事業にすぎないのである。彼等の所謂正義人道とは、皮相なる利用厚生上の道具にすぎない。彼等には、佛教徒の所謂見性の生活が絕無である。トルストイは、八十餘年の深刻なる苦惱を重ねて、遂にその口に說くところを實行し得なかつた。私はトルストイを貶する譯ではない。然し私は、一概にガンディー氏とトルス**トイとを同一視することは出來ない。**トルストイが達せん**として達し得ざりし境地に、**ガンディー氏は易々として達してゐるではないか。しかも氏は、良書の一として、謙虛に、トルストイの著述を擧げて居る。曾て東西文明の調和者として、ラビンドラナート・タゴール氏を推讃した西洋人は、恐らく眞の意味に於ける文明の精髓に觸れたガンディー氏を、何故に考察しないのであらうか。二元に惱んで居る西洋文明は、遂に東洋文明の太元に合する時はないであらう。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

托鉢のあと

三石勝五郎

合掌

血も肉もおのゝきて
たましひはめさめたり
托鉢のあまきつかれ
かるくたゞよひ
灰色の雪隠に
くもの巣はらひて
小さき窓から拜んだ日よ

朝ほのぐゝこ
落葉の山はあかるく
空にかゝりて
雲白く彼の峰近く湧き出でぬ
御佛在す善光寺
はや參詣に
人さまぐゝのおん祈り
耳をすまして鐘をきく

――天香師に隨伴して――

草をむしりて

雑然こした
影を踏んで
罪の子は何處へ行く

東京の街中なれご
丘に來て
落葉はく家はあり
君はあり

草をむしりて
空を見つむる
欅の枝に月はあり
心あり

座してきく
こほろぎ――
天地の秋に
我ひこりかな

――本郷駒込林町にて――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

せりの根

市の日のかへりは
荷を下して
道端にせりを摘む

少女等が摘み捨てし
せりの根は白く
堰に溺れる

口づけて見し
あまき香り

無我の愛は
白日の下に
誰の名を呼ばうぞ

——秋田にて——

なやみ

又更らに
新らしきなやみ覺えて
たましひは心の古巣へはねあがる

たましひは愛にみもごり
血を吸ひてにぢみ出る吐息かほのほか

心は遠く、火をもして
迷へる人を救ひにみちびく

雪ひら〳〵こ窓にふる
又更らに新らしきなやみ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

道德的要求の根本的要素と副次的要素

中桐確太郎

左掲は、昨夏、或講習會にて申述べましたものゝ一節で、本誌前號の『愛より道德へ』の續きとして御一覽をいたゞき御叱正を仰ぎたう存じます。

一

私は愛の活らきを解して、自他一體感を他に對して具體的に顯彰せんとする欲求なりとし、此の自然の欲求が、自己の身神の不完全に伴ふ種々の障碍に遭遇することによりて、當然の要求となり來る處に、道德的意識なるものが發現するのであると申しましたが、かく解釋いたしまして、果してよく道德的要求に存する特異の性質を說明することが出來るでありませうか如何かを簡單に調べて見ませう。

道德的要求の特異性の一つは、それが他の種々なる要求に對して主上權ともいふべき地位を占めて、他のすべての要求(及び要求の具體化たる行爲)を批判し、或るものを善とし正とし、或るものを惡とし邪とし、正善なるに對しては之を爲すべし、爲さねばならぬと命令し、邪惡なるに對しては之を爲すな、爲してはならぬと命令し、只命令するのみでなく、他の如何なる欲求にても之に反するものは一切之を排斥して、その命令する所を斷行すべしと、尊嚴冒すべからざる權威を以て臨み來る一種の强迫性を有する所にあるのであります。

人を動かす要求はなか〱に多いのであります。併しながら、如何に强い要求でも、即ち富でも、名でも、戀でも、殊に凡ての生物を最も强く動かしつゝある所謂る生きんとする要求でも、もし道德的要求と相反する時は、道德的要求はそれ等の一切をも犧牲にすべきことを命令するのであります。もとより人間は弱いものでありますから、强い要求には負かされがちであります。私の友人に非常に眞面目な方がありました。今は東京の或る最高學校の幹部に居らるゝ方ですが、その方が未だ學生中の或る夏、兩國の川開きに、丁度暑中休暇の折ですから、浴衣がけの薩摩下駄といふいでたちで、花火見物に出かけられました。東京名物の一つでありますので、夕涼みがてらに人出も多く、人に押され〱て遂に兩國橋

然るべき處まで進み出でました。橋はまだ今日の如き鐵橋とならず、廣重の繪、その儘の木橋でありましたが、花火の番數もかさなり、興も酣はになりました頃、その橋の中程が、潰落したといふので、遽かにワアといふ叫び聲が起り、人々なだれを打ちて、押かへして參りました。私の友人も心も空に、倒れたる人を踏み越え〳〵逃れ走り、先づ安心といふ處まできて、顧みれば、老若男女、押倒され、踏みつぶされ、阿鼻叫喚の慘狀を呈してをります。さて省みれば、自分は大きな薩摩下駄で、倒れたる人々を、處えらばずふみにじつて來たのである、日頃道德上の修養などと云つて、得意になつてをりし身の、餘りのあさましさに、人知れず慚愧の汗を流したことであると、その翌日、來訪しての話であります。

覺悟を決めれば、少しも恐れず敢て歡迎し得る死でも、かゝる突差の間に來る時は、人は脆くも、生の要求に打負かさるゝものであります。この講堂で、鹿爪らしく道德上の話をしてをりましても、もし急に地震とか、何かの變事が生じた場合に狼狽して一番先きに飛び出すものは、かく申す私かも知れません。

人間は誠に弱きものでありますから、ともすれば強き要求の爲に支配せられがちでありますが、もしその強い要求が道德的要求に相反するものであつた場合には、道德的要求は何の假借することなしに之を叱責し、心には何ともいふにいはれぬ苦悶と懊惱とを感ずるものであります。良心の呵責と稱するものは即ち是れでありますが、此の不快苦惱の性質は、これ以外のあらゆる原因より來るものと趣きを異にし、此世ならぬ特殊の色彩をそなへてをります。思ふに詩人が地獄を描くについての想像の資料となり根據となつてをるのは此の靈的經驗ではなかつたでせうか。之に反して、凡ての要求の誘惑を排斥し、あらゆる艱難の威嚇にうち勝ちて道德的要求を滿足せしめたる場合には、所謂る良心の嘉賞は中夜の天樂となり、其の妙へなる調べに慰安を奏なで、此世に存する凡百の外的條件の與へ得ざる聖悅を心に感ぜしむるでありませう。淨土樂園のモデル即ちこゝにあるのであらうかと思はるゝのであります。此の如き獨特の快樂苦惱は、また道德的要求に存する特異性の一つに數ふることができると思ひます。

道德的要求の特異性のうちには、また眞我に關する特異の體驗とも稱すべきものを計上せねばなりません。先づ第一に自分の爲すべき事と認めたるものは、その事柄の何たるに係らず、自分が實現せねばならぬと感ずるのであります。所謂る義務の念、責任の感でありますが、その責任義務と感ずるものは、他の者が外から命ずるものではなくて、内より自か

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

ら命ずるものであるといふ實感を伴ふのであります。所謂る自律性を有するのでありますが、此の自ら自分に命ずる所のことを自から實現することを怠る時、孟子の所謂る餒ゆるの感じ、即ち自分が何となく物足らず、充たされざるを感ずるのでありますが、之に反して、自から命ずることを實現することが出來ました時は、自我が充實せる樣に感じ、本當の我がそこに活躍しつゝあるやうに感ずるのであります。そしてまた、かくして感ぜらるゝ自我そのものは、啻に自分の肉體に限られたるものではありませぬ。勿論、道德的要求を實現するにつきては、自分の肉體及び精神によるの外はありませんが、更に自分の身神以外に、人なり、物なりの力を借り、それ等を通じて之を實現する時、その結果に對する責任は、等しく自分が負はねばならぬと感ずるものでありますが、責任義務の念が擴大する時、それに比例して自我感も擴大して行きます。但し責任義務の念の擴大は、此の如き外的所緣に依るばかりではなく、なほ種々の內的原因に由ることもあるは申すまでもありません。佐久間象山が『余年二十以後、乃知匹夫有繫國家、三十以後乃知有繫天下、四十以後乃知有繫五世界』と申しましたるが如きは、識見開發、理想向上の結果でありませう。かゝる體驗の境地に到達いたしますれば、自我の感はます／＼擴大して、遂には孟子の所謂る浩然の氣のやうに、至大至剛、天地に充塞するを感ずるに至ることもあるべきでありませう。

二

以上申述べたる如く、道德的要求は、その他の諸要求に對して絕對無上の尊嚴なる權威を有し、その實現には特異の自我感を伴ひ來るものでありますが、之を自他一體觀の立場より如何に說明すべきものでありませうか。

たび／＼申しましたやうに、一切萬有はその根柢に於て一體なのであります。然るに若し其の基礎の上に立ちて萬有は活動し、諸種の要求を滿足せしめんとしつゝあるべきであります。一體といふ根柢基礎である萬有一體といふ事實が否定せられ若しくは輕視せられつゝあるを見る時には、潛在せる本具の萬有一體感はその存在を肯定し、その實現を要求するのである。一切全體を根據とするものなるが故に、その權威は絕對無上と感ぜらるゝのであります。絕對無上なるものに對する時、吾々はそれに尊嚴を感ずるのであります。全體を根據とせる其の要求が、一個の肉體精神を通してあらはるゝ時、その身神に即せる自我が、自から爲さねばならぬといふ責任義務を感ずるのである。然れども其の自我と一切他とは

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

本來一體なのであるから、全體的要求も、自分が自からを律するものとして感ぜらる丶のであり、また其の要求に常に從ふ時、心廣く體胖かに、自我は遂に天地に充塞するに至るを感ずるのでありませう。一切他と自分との一體感の具體的顯彰、是れ即ち愛であり、そして愛の上に立てる世界、是れ即ち天國淨土であるとするならば、全體的要求の實現と否とに伴ふ快苦の感に、天堂地獄的の趣きある所以も、また解することが出來るやうに思はる丶のであります。

此の如く解釋して參りますれば、道德的要求の特異性と、自他一體感の實現たる愛との間には、密接不離の關係が存することいふことが出來ます。道德的要求の特異の權威は、一切の萬有本來一體たるの事實に基礎を有するものである。別語を以て申しますならば、自我を通じての全實在的實現欲であるといふ處に存すと謂ふべきでありませう。併しながら、道德的要求の特異の權威に强大を加へますものは、此の根本的要素の外に、更に有力なる要素の存することも認めねばならぬと思ひます。根本的要素に對しますれば、寧ろ副次的要素とも申すべき性質のものでありませうが、その勢力の强さは却て大に優れるものがあると思ひます。私は假りに之を名づけて、團體生活の維持と申して置きます。此の事につきて尙ほ少しく申述べて見ませう。

三

（先にも申しましたやうに、）人類は社會的生物であつて、團體生活を營まずにはをられぬものでありますが、その團體的生活が健全且つ長久であります時は、先づ多くの場合に於て、その團體を形成してをる各個人の自由、即ち各自の性能を活動發展せしむることの自由が保證せらる丶のであります。一の國が、いつも弱く、敗亡の歷史を重ねつ丶あるとか、或は組織當を得ず、綱紀亂れがちであるとか申す場合には、その中に住んでをる人民は、所謂る堵に安ずることが出來ずその特殊の性能を自由に活動發展せしむることなどの出來ぬもの丶多かるべきは甚だ明かなことであります。殊に國家本位の現代に於ては、弱小なる國家に屬する人民の狀態は誠にみぢめなものといはねばなりません。之に反して國家の成立ちが强健であり、長い間繼續し來りました場合には、團體生活の生命とも申すべき自他一體感が涵養せらる丶を常といたしてをります。即ちその國民は、內にありては、有無相通し、緩急相濟ひ、相互扶助の情がます〳〵深くなり、外に對しては、好みを通じ、寇をふせぎ、生死を共にし歡苦相分ち、同心協力の念ます〳〵あつくなりゆくのであります。團體生

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

活は現世に於ては、多くの場合、愛と我執との混血兒でありますが、健全なる團體生活は、現今の如き精神生活に於きましては、自他一體感の涵養所として須要なるものであると認めねばならぬのであります。

此の如く、健全にして長久なるを得る團體生活は、自由と愛とを成育せしむるの所でありますから、團體生活を維持するといふことが、また一つの道德的要求となつて來るのであります。根本直接の要求ではありませんが、根本の要求を助成するに與つて力ある間接副次の要求といふべきでありませう。然しながら人を動かす力は、根本的のものよりも一層大なるのが常であります。

抑も團體生活なるものは、その成員相互の間に存する自他一體感、即ち愛を基礎として存立してをるものでありますが人々が殊に種々なる團體生活を形つくる所以のものは、それによりて各自の諸種の欲求を滿足せしめんとするにあるのであります、そして現今の如き程度の精神生活に於ては、その間に於ける我執の跳梁跋扈、頗ぶる盛んなることは申までもありますまい。團體生活、殊に國家の起原を『人々仇視』より來る相互の不利益を減少せしむる爲に相約束して團結せりと說くも、または强力の征服によれる結合なりと說くも、それ〴〵一面の眞理の存することと思ひます。いづれにしましても、現存せる團體生活は愛と我執との要素から成立つてをるものであります、そして其の我執の勢力は中々に强いのでありますから、之を何等かの力によりて統制し行かねばならぬのであります。それで團體生活を維持する爲には、權力（武力と法律と）の行使を許容することを以て便なりとするに至るのであります。權力の行使は肉體及精神に及ぼす外部よりの强制を意味するものでありますから、根本的要求の、單に內的自律なるに比して、强制の力、大なるを感ぜらるゝも當然のことでありませう。

四

權力の行使者つねに一方に偏り、その地位を占領することが長く繼續いたしますると、權力行使者の我執と、被行使者の畏服との結果、因襲の久しき、所謂る階級心理なるものが發生し、遂には專制主義の道德が馴致せらるゝに至るのであります。權力階級のものは、やゝもすれば自分等は特殊の優れたる人類であるかの如くに考へ、如何なる振舞をなすも差支なしと思ひ、無權者階級に屬するものを以て、從來の慣習以外に超脫すべき資格なしと考へたりするを常とします。此頃の大工は不埓にも敷島などをくゆらしてをる、甚だ怪しからむとか、農夫の娘のくせに絹張の洋傘をさしてをる、不屆き千萬であるとか、車屋のくせに新聞を讀んで理窟をこねる、身の程知らぬ僣上者であるとか、甚だしきに至ては、女のくせに生意氣に眼鏡をかけてをるとまで言ふたり、言はぬまでも思ふたり致します中には、專制主義道德の影響

この出來るものも、中々に尠なからぬことゝ思ひます。此の如き專制主義の道德が認められつゝある所に、個人の自由が犧牲に供せらるゝことのあるのは當然の勢でありませう。團體生活を營む所以の目的は個人の自由を享有するにあつたのである。即ち人々各その性能を自由に活動發展せしめんことを（有意識的に、若しくは無意識的に）生起上の目的と致して居つたに係らず、團體生活を維持する必要上よりして、權力の存在を承認せるの結果、當初の目的たる個人自由の享有を忘却するに至つたのが、專制主義の弊であります。此の如き病弊の生じますのも、團體成員に我執の存する限り、餘儀なき勢かとも思はれます。それ故に專制主義は古き歷史を有する國家には殆んど必然的に生じ來るものゝ樣であります。勿論、征服等によりて或る國家に、突如として專制主義の行はるゝこともあるのでありますが、專制主義の自然の發育所は、古き歷史を有つてをる國家であらうと思ひます。恰かも蕁菜が古き池より生ずる如くでありませう。但し古き池は水が停滯してその間に種々なる化學的作用を發生するからでありませうが、もし新しき水が常に流通して、化學的作用を發生する暇のない狀態であるならば、古き池であつても蕁菜を生ずることは出來ないと同じやうに、國家の組織如何によりては、必ずしも專制主義の生ずるものでないとも申されませう。しかし概して論じますれば、我執と愛との混血兒たる國家に於ては、歷史が古くなれば專制主義が自然に生じてくる傾向を有つて居るやうであります。そして所謂自由なるものゝ行はるゝ所は、古代希臘の如く、または初代の日耳曼民族の如く、若き歷史を有つてをる國民であると思ひます。このことにつきては、その道の學者の御敎示を仰ぎたいと思ひます。

五

以上述べました如く、如何なる因緣かによりて專制主義がその弊を現はし來り、それがだん／＼甚だしくなつて參りますと、かねて忘却せられ、壓抑せられてをつた自由は、遂にたまりかねて、はねかへし、その要求を主張するに至るものであります。即ち團體生活本來の目的に歸らんとするのであります。自由の要求が、復活再興するに至る由來は誠に興味ある歷史硏究の題目でありますが、私は今此の敍述に入ることは出來ません。只自由に對する要求、及びその結晶ともいふべき個我の主張、人格の尊重等もまた、種々なる意味に於て道德的要求の主もなる要素となり來るものであることを一言つけ加へておき、それ等に關する愚見の陳述は他日の機會に讓りたいと思ひます。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

懺悔祈禱の人

納屋のいのり

松下吉衛

東京に程遠くないS村の片ほとりに、とある商賣店の二階を間借して、母とたゞ二人、佗住居してゐるKといふ醫學士があつた。

もう、幾年か前から、父は□□□□□□が出來て、外に出てゐた。家計はどうにもかうにも仕樣がなくなつてゐた。乏しさは日に日に募つていつた。

債鬼の威嚇、精神上の苦悶……それは母親にとつて涙なしには通ることを許されぬ『いばらの徑』であつた。寢なれない寒夜の切なさに、彼女は、幾度、死を思つたゞらう。

たゞ、そこにはKがゐた。Kは一人子であつた。『Kを成人にするまでは』と、母は、堪へがたきを能く堪へて來た。Kが大學を卒業する前の一年といふもの、その困苦は、殆んど絶望的だつた。Kも何度か退學を決心したのであるが、いつも、母親の烈しい反對にあつては思ひ止まつた。

Kは、かうして、ともかくも、大學を終つた。

過去が暗黑であつただけそれだけ、母親は、息子の卒業に、自分の世界の黎明を望んで、さすがに、微笑を禁じ得なかつた。

けれど、微笑は長く母親の顏に留まるのを許されなかつた。彼女は知る筈もなかつたが、卒業の頃には、Kは、すつかり、醫術といふものに、自信をなくなしてゐて、病人の脈をとるなどゝは、思ひも寄らないことになつてゐたのだ。『醫術のはしくれは敎へられた。でも何の爲めの醫療だらう。自分には「人生」がわかつてゐない。根本のこの問題が、

りにして、病人の世話位したとて何にならう。』かう考へたＫは、母親の心づかひを、知りすぎる程に知つてをりながらも強いて乞うて、大學院に研究を續けさせて貰つた。惡いことではないから、母親も、表面上は反對もしなかつたけれど、心では、さすがに喜べなかつた。

Ｋは專攻にわざと基礎學の生理を選んだ。それには理由があつた。指導の教授が『□□論』『□□と□□との境』の著者として有名なＳ博士であつたのと、病人を直接あつかふのを避けたいからであつた。Ｋはそれは勉强した。電燈がついてから歸り〳〵した。日曜日でも彼の姿が研究室に見られないことはなかつた。母親は、彼の健康を氣づかつて、乏しいなかゝら、夕餉の膳を賑すことを忘れなかつた。

かうした生活が、一年あまり續けられた。

親切な指導教授は切りに彼の研究を勵ました。彼も一時はその期待にそむくまいと決心した。彼の前途は、輝いて見えた。

しかし科學には、超えることを許されない限界があつた。哲學的思索は、彼が內心の要求を徒らに紛糾に導いて行くに過ぎなかつた。研究室から段々遠ざかつて行く自分を、彼はどうすることも出來なかつた。來る日も來る日も、自分の部屋に閉ぢ籠つて机の前に坐りつ切りで、別段、調べものをするでもなく、たゞヂーッと考へ込んでゐるＫを見ては、母親の心は傷まないでゐなかつた。不安な日の下に、母子は、言葉らしい言葉も交さないで、ひねもす過すことも、稀ではなかつた。Ｋは眠れないといつて、よく夜中に出掛け〳〵した。

母は、ほと〳〵困つてしまつた。言葉で云ひきかせたとて、どうともなるものでないことは、わかりきつてゐる。

『お母さん、ほんとにすみません。私自身も苦しくつてしやうがないのですが、どつちへも、まだ、踏み出すことが出來ないのです。どうぞ、おこらへください。』かう哀願するやうに、詫びいる我が子の心を察しては、母は、きつい言葉もきかれず、人なきところでは、たゞ、わけもなく涙にくれるのみであつた。

Ｋは、その頃、ふとしたことから『折蘆遺稿』を讀む機會を與へられた。現代の傾向や思潮やに、烈しい嫌惡を感じ、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

名のみ美しい文化生活の内容の貧弱さに慊らないで、ひとすぢに、古典的神祕的原始宗教に、强いあこがれを持ちつゝ、病の故に夭折した、多感な著者の、欺かざる感想錄と消息文とは、彼に、圖らずも、一つの光をなげてくれた。それは、同書の中に、『西田天香』といふ名が、散見されることを通してゞあつた。彼は何故と知らず、この名前に强く索きつけられる自分を見出した。『天香といふ方に、是非あつてみたい。あへば、きつと、敎へられる。』行き詰り切つてゐた彼の生活は、かうした、はかない、まだ見ぬ戀にも似たやうな、白毫思慕の念に、せめてもの望をつなぐ程に空虛であつた。

　それから、程もないことであつた。閑暇を見てはKが見舞ふ習はしになつてゐる、長年、呼吸器を患つて裕でない、ある未亡人の家で、次のやうな會話が交はされた。

『奥さん、これで七厘によりつかん。』

いつものやうに、藥をこしらへて、持つて行つてやつたKは、慰め心地で、藥瓶をふりながら、冗談半分にかう言つた。診察がすむと、Kの方から、くつろいで、こんな風にとりとめもない雜談をしかけるのが例になつてゐた。未亡人も、無口なKが、彼女を慰めるために、彼女だけには殊更にかうまで務めてくれてゐることを知つてゐるので、喜んでいつも話し相手になつた。その日も話しは多岐多様に亘つた。ふと、未亡人の言葉の端に、『てんこうさん』といふ名のもれたのをKの耳は鋭どくとらへた。Kは、もしやと思つて、尋ねてみた。

『あなたは、今、「てんこうさん」といふ名前を、おつしやつたやうでしたね。「てんこう」とは、どう書くのです？』

『天地の天と、かをり(香)といふ字です。』

『さうですか。その方のことを、よくご存知ですか？』

『えゝ、存じてをるどころでは御座いません。かうなつてから後、私共親子して、いくら御厄介かけましたか、わからない位ですの。あなたも御知合でゐらつしやいますこと？』

『いゝえ。たゞ、ある本で、お名前だけ知つたのです。』

『さうでしたか？　本になどお名前が出てゐましたか？　……その筈です。御自身には、一寸も、あらはれやうとなさらんでも、ほんとに、おえらいのですもの。京都で一燈園といふのを遊ばしてゐらつしやるのです。眞劍な求道者が各地

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

からお見えになつてゐまして、それは、すごい祈りの生活をなすつてゐます。私共の寄せて戴きましたのは、彼此三年ほど前のことでしたが、それは、隨分、惠まれました。かうして、こんな病にかゝりながら、無分別な氣にもならないで、生活させて戴いてますのは、一燈園のお蔭でございます。』

未亡人は、それから、Kの問ふに任せて、一燈園生活の内容、同人日々の行持たる托鉢の模樣など、自身の經驗を交へて、色々物語つた。

Kが未亡人の紹介によつて、天香師に會ふことの出來たのは、それからあまり間もないことであつた。

天香師に會つた時、Kは餘り多くを語らなかつた。たゞ唯々として、師の言葉に、ほゝ笑ましいおもゝちで、無言の點頭を續けてをる、平靜を極めた彼の態度は、外目には、その熱心と眞面目さとを疑はれる位であつた。が、彼としては師の一句々々が、ヒシと、たましひにこたへるので、驚異のあまり、言葉をきく餘裕すら持たなかつたのだ。

やがて、京都の一燈園は、Kのおとづれにあつた。東山の麓に建てられてある、あの建物は、Kの豫期したよりは、整つてゐた。Kが一燈園についた時、天香師は、どうしても手をぬくことが出來ない賴まれ用で、大阪へいつてゐて留守であつた。

『あなたがお見えになつたら、萬事私にお世話申すやうにと、天香さんからのお話でした。私はMといふものです。七條驛までお迎ひ申さうかと思ひましたが、天香さんの外、誰もあなたにお會ひしてゐませんので、反つて行き違ひになつてはと、わざと控へました。道が一寸おわかりにくかつたでせう。』

Kを座敷へ招じ上げた青年は、初對面の挨拶がすむと、Kにかう話しかけた。そのうれひを帶びた深い眼と、純朴そのものを思はせるやうな言葉づかひとは、Kの心を捉へずにはおかなかつた。話が進められるに從つて、二人は、お互の中に「友」を發見した。日が暮れると間もなく、在園のもの五六人が、一日の托鉢を終へて歸つて來られた。Kは一々紹介された。禪堂での話しの團居に、Kも加へて貰つた。話されることゝ、そこを流れてゐる空氣とに、Kはどういふものか

好感を持てなかつた。一燈園での修行のなみ大抵でないことを思はせられた。

床に就いて、KとMと二人になつてから、次のやうな話しが交はされた。

『隨分いろ〳〵な方がゐるので、びつくりなすつたでせう。勿論、いゝ人も集まつて參りますが、さう具合がよい時ばかりは、ありません。やつぱり、人間同志の集まりですから。問題のある人だから來てゐることも解釋されますもの。しかし見學の精神にさへ、こちらが、なつてをれば、何でも差支はないわけです。』

『全くです――。』

『天香さんも、それはお大抵ぢやありません。――』

『でも、あなたのやうな方が、ゐらつしやれば、お心强いでせう――』

『私など、てんでだめです。どうしても、一行に澄み切れないものがあつて、困つてゐます。何も持つてゐないんですが藝術が私には忘れられないのです。』

Kは、やつぱり、さうであつたか、Mは藝術家であつたのか、と、自分の直觀の間違はなかつたことに、ほゝ笑ましい氣持がした。

『やつぱり、あなたは、藝術をなさる方でしたね。どうも、最初からさうと感じてゐました。』

それから、夜半すぎまで、二人の話はつゞいた。Kは、Mを見出しただけでも、一燈園をおとづれたことに、心からの祝福を感じた。

天香師は、一日おいてその翌日、大阪から戻つて來られた。Kに對する天香師の修行の躾ぶりは、可なりすごいものであつた。夜は一時二時の歸園が續いた。戸締の全くない園は、出入が自在なので、彼等の歸園を知る者はなかつた。朝は朝で、看經が濟むと、朝食もとらせられないで、師に從つてKは街に出て行かされた。托鉢先へ回る途中々々も、師は、Kとの問答を忘れなかつた。Kは師に對すること多くを語る氣になれなかつた、又その必要もなかつたのだ。思索的に、行き詰るところまで行き切つてゐたKの心境には、托鉢の生涯は、説明を要するまでもなく、あるはずの事がその通りにあつたやうに見えて、疑問を挿む餘地さへなかつた。最初、師に會つた時と同じやうに、Kはたゞ唯々として聽いてゐた。さすがの師すら『この人はこれでいゝのかしらん。』とあやぶんだ位だといふ話しである。

Kが一燈園生活の見學には、さう長い時間を必要としなかつた。在園十日あまりして、Kは京都から立つて行つた。Mは

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

いたく別れを惜しんで、七條驛まで、Kを見送つた。汽車に乘込んで、車窓から頭を出して、Kが名殘の會釋をした時、Mの寂しい深い眼は、うるほひに光つた。Kはその眼を始終想ひ出さゝれた。『何といふ人間味の豐かな人であらう。今まであんな人に、あつたことがない。』Kはその眼光を想ひ浮べる時、自分自身にかう言ひ〳〵した。（幾年かの後、Mが頻死の重患を押して書き綴つた戯曲『〇〇と〇〇〇』が初めて世に出た時、その眞價値を天香師に推薦して措かなかつたものはKであつた。最初、あたり前の相談では出版業者さへ快くはその出版を引受けてくれなかつたといふ本が、記錄を作つた程に廣く讀まれ、そつちこつちの劇場で上場されるやうになつた時、Kは、自分のことのやうに喜んだ。）

一燈園生活の實際を親しく見學して歸つた後のKは、もう、これまでのやうな生活には、一日も堪へられなかつた。母親をこの上にも泣かせることは、彼にとつて堪へがたい試練であつたが、今は、淺はかな人情に囚はれて、大事を誤るべきでないと、彼は觀念した。彼は目を蔽うて、ヂーッと祈つて、通り過ぎやうと覺悟した。彼は、かどでの血祭りのつもりで、書きかけの可なりな頁數の論文を火にかけて灰にして了つた。大學院は彼の退學屆に接した。

S博士はじめ、Kの同僚には、何のわけやら、了解が出來なかつた。

母親の、うろたひは、また例へやうがなかつた。我が子の正氣であるかどうかをさへ疑つても見た。せめては、かうした時だけでもと、氣丈な性ながら女は女だけに、相談相手になつてくれる人の居ないのを今更のやうに嘆いた。かうした、つきつめた求道心が、周圍に及ぼした、われひゞのいた〳〵しさを、これまで、餘りに經驗させられすぎて居る天香師は、遙かに手紙して、その輕擧でないかを、懇ろに諭しさへした。

Kの返事は簡單を極めたものであつた。そしてそれは常識を越えた言葉で結ばれてゐた。返事といふのは次の如く讀まれた。

『大學院は止めました。まだ何もしないで居ます。御諭旨は辱く御受けいたしますが、今の私を養ふ母は、世にも光榮だと信じます。』

若し亂暴としたら、何といふ亂暴な言草であらう、大學までも卒業させて貰ひながら、世間的には、これぞといふ、仕事らしい仕事もしてゐないで、尙、親がかりの今の身として、それも、なみならぬ境遇にある母の一人子として。若し深い信念から迸り出でた言葉とすれば、これは又、何といふ高邁な宣言であらう。

『恩を棄て、無爲に入る、是れ眞實の報恩者。』手紙を手にして、うや〳〵しくおし戴き、かう口づさみながらも、天香師さへさすが判斷に苦しんだ。しかし、續いてもたらせられた飛報は、彼の篤き信仰と深い覺悟とを、證據だてるに、不充

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

分ではなかつた。

Kは、果然、文字通りに家を出たのであつた。なまなか泣くには餘る思ひに、三日が程は、飯粒一つ咽喉が通らなかつたといふ母を、ひとり殘して、出家したのであつた。

晩春のS村の夕は、花見る人の往來も絶えて、もう夕靄が一體に立ちこめた野路を、感慨にくれつゝも、極度の緊張味を、そのおもゝちに表はして、獨りとぼ〳〵と辿り行くものはKであつた。今宵から直ちにどこといつて宿るあてもないことを思へば、さすがに、思ひ切つた家出をしたものと、われと驚き異しみつゝも、あつちこちと空に瞬きそめた星の光を仰ぎなどして、一歩は一歩と、ふみしめて行つた。

野路はおのづと彼をとある農家に導いた。路のぢきわきの納屋みたやうな小舍に、藁が一ぱいに積んであるのが、彼の目に入つた。許されゝば、こゝで今夜は宿らせて貰はうと思つた。彼は暫らく立留つてゐたが、やがて意を決して、下駄にふまへられて、ざわ〳〵する藁の音を耳にしながら、中へとわけ入つた。そのとたん、思ひも寄らぬ怒聲を後からあびせられた。

『だれだ? そこへ……何しに入るだ?』

かう推何されて、ふりかへつた彼の前には、野良からの歸りであらう、鍬を片手に百姓男が、仁王立ちに起つて居た。彼は、すなほに、會釋した。

『お咎めで恐れ入ります。詳しく申上げねば、おわかりでないでせうが、實は、修行のために家を捨てゝ出たものでございます………』

『え? お前さん、なにか、その修行とやらのために家を出なさつたと?』

少しせきこみ氣味に、かう言ひつゝも、あまりに意想外なKの言葉に、百姓男は、じろ〳〵彼を見守るのであつた。が、別に、うろんくさい所がないばかりか、緊張し切つた、しかしつゝましやかさを失はない彼のおもゝちに、何か打たれた所があると見えて、初めの態度をがらりかへて、固辭する彼を、強いて母屋の方に招じていつて、種々、懇ろにもてなすのであつた。そのうちに、女房らしい女も出て來て、茶をさして出すやら、夕餉をすゝめるやら、農家の忙がしい夕暮時を、彼にかゝりきりにされさうなので、彼は反つて落付けなかつた。托鉢の最初の家ではあるし、とりわけ、道心堅固にかまへねばならないと感じて、彼は夕餉の膳も型ばかりに箸をとつて遠慮した。そして振りもぎるやうに外へ出て、前の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

納屋に、その夜は、やすませて貰つた。藁をひとねの宿りは、もとより、夢園から う筈はなかつた。けれども、何故とも知らず、彼は、心に限りない法悅を覺えて、涙は止めどもなく、頰を流れ下るのであつた。何物にか感謝せずには居られぬ、心の奥底からのおごそかな力に、おしすゝめられるやうに感じて、彼は暗黒の中に藁につゝまれながら合掌して祈つてた。

あくる朝、百姓男は、めざめさま、戸をくりあけて納屋の方に行かうとすると、そこに、箒をもつて庭前を掃き淨めてゐるKを見出だした。あたりは、まだほの暗かつた。百姓男は無言のまゝしばらく立ちどまらされた。

『まあ、お若いに、ほんとに感心な。勿體ない〳〵。』

Kは、これに輕く會釋して、尙も掃き續けた。狹くもない庭が、あらまし片づいた頃、朝飯の用意が出來たとて、よばれた。此の時、彼の全身は、程よい勞働に、少し汗ばみ氣味であつた。氣が張つてゐるせいか、不眠のつかれなどは、少しも覺えなかつた。百家屋の誰もが心から眞の同胞のやうに感ぜられた。ほゝえみが、どの顏にも〳〵にも湛へて見えた。百姓男は『差支なければこのまゝ幾日でも滯在してくれるやうに』と、申出でた。かくまでとは思ひかけなかつて捨身の功德のいちゞるしさに、Kは首をさげずに居られなかつた。

その頃までに、京都一燈園に來て居たKの友人――大學を出るとすぐ新領土の或る大きな病院へ赴任して行つたけれど生活の矛盾に堪へられないで、とう〳〵職を抛つて了ひ、今は、Kの紹介で、天香師の下に一修行者として托鉢の生涯に立つてゐるI醫學士とMとが、S村消印の連名宛の葉書を受けとつたのは、Kが出家第二日目の夕方であつた。葉書は次のやうに讀まれた。

『今、私は家を出る。何處に行くかを知らない、又知るの要もなからう。神は、すべてをよろしきに叶はせ給ふべきを確信すればなり。

兄よ！　若し許されるなら、わが母が佗住居に托鉢には來給はずや。』

之を見せられた天香師は、さきの『今の私を養ふ母は世にも光榮です。』の言葉を想ひ浮べて、

『ようやつてくれはつた。』

と、たつた一言いはれたきり、目を瞑つて、やゝしばらく合掌された。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

返照錄

□宗藤中兄（廣島縣三次町）　京都へお着き遊ばした御事と存じますお疲れ樣で御座いませう。

先日は不思議な御緣で足をお止め下さいましてどんなに多くの人々がお喜びになりました事でせう、お手紙により又直接のお話により皆樣のお悅びの御樣子を見させていたゞいて私のことの樣に嬉しく思つて居ります。

其後多くの人樣にはまだ觸れる機會を得ませぬのではつきりしたお光の威力を拜んだとは言へませぬがそれとなく私の周圍に其の渦卷を感じられます、そして私は其の萠の力強く生長することを身を以て祈り度く思ひます私に其の使命が課せられてゐるのだとさへ感じて嚴肅な氣持ちに打たれる事が御座います仰せの如く私は尙ほ一歩も二歩も進まなくてはなりませぬ。

京都から參りまして以來或るまとまつた仕事の都合で私の家以外への托鉢は出來ませんでした、そして私が所謂美術に對して執着を持つて居ります故に專心に私の時間の凡てを人樣への奉仕に捧げさせていたゞく事が出來ないのも所謂藝術をもたれぬ托鉢者に比して燃えきらぬ點だと感じてゐます美術が第一義のものでないなれば私は斷然それを捨てる決心で御座いますが現在の私の感じでは托鉢と同じ祈りと力とがそれにこめられるものだと云ふことを信じて居ります乍然其の美術の根據が托鉢と同質の源から發すべきものだと云ふことも先生のお諭しの如く信じて居ります、此の二者を魂の上から實生活の上から渾然と調和したものにして表現することは貧しい現在の私には此の上ない大事業です幾度か滯こほり躓づく事も覺悟せねばならぬと思はれます先生のみ敎へに從ひ托鉢を中心として私の力の續く限り此の事業に參じて見たいと祈らせて貰つてゐます愚鈍な私で御座いますから氣永にお導き下さいませ、母も重子も悅んでゐます以前からかなりこれ迄とは違つた見方で生活して來ましたが御來車以來追々一燈園化して來てゐる樣で御座います

母には數人の信仰の友が御座いまして每月集合して氣に入つた導師を迎へてお話しを聞いてゐましたが、母はもうあんななまぬるい事を繰り返すより其の日は凡てに對して、所謂一燈園式に奉仕し度いとか云つてゐました。私も其のことに就ては考へて居ります私の家と美術とに奉仕する以外、外に向つても時間の一部を捧げさせていたゞき度いと考へてゐます。

先日お話し申上げました節お伺ひ致しますのを控へて居りましたが藝術の表現に費されます物質は勿論何等かの形式による淨財でなくてはなりませぬがそれにたずさはります時期は、丁度托鉢が直接人樣の口から賴まれるのを待たないでも自然の啓示によつて動いてゆきます如く美に對する創作欲の最も熟した時筆を取るのが美に對する眞の托鉢の時ではないのでせうか。

其の機は人から賴まれた時とか賴まれぬ時とかいふ事にかゝはりない事の樣に存じます、そして其の機を逋がしては再び得ることの出來ない場合があります。若しこの氣持ちを許すと致しますと養はれる物質と托鉢と美術と（强いて別ければ）の三者の關係が只賴まれゝば作ると云ふ場合より違つて來る樣に思はれます私も尙これ等と眞の懺悔奉仕の氣持ちとに關して考へを練つて見度いと思ひますが先生も御寸暇が御座いましたら御高見おもらし下さいませ。

御禮旁々お伺ひ申上げます、母や妻からも深い感謝を捧げさせていたゞきます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

先生はじめ園の皆樣の上に恩寵の益々豊かならん事を祈らせていたゞきます　敬白

二伸

私に關する事の樣でこれ迄先生に申上げる事を好みませんでしたが私のことをあれほど氣にかけて下さいます慈父に悦んでゐたゞきます爲めに、私が托鉢し行乞してゐました事から此の土地だけにおきましても實に鮮やかな光の力の働きました事を二三耳にして居ります。私の祈りの小さいながらも祈りさへ眞でありましたらそれに相當したゞけの神のほゝえみのあります事を有難く思つて居ります。

（天香氏宛）

□平岡とみ姉（東京府下大久保百人町一九）

御機嫌よろしうゐらせられ遙かにおよろこび申あげて居ります。

去る十六日林慶之亮氏來訪、先生の御消息を承まることを得おなつかしく存上候御多忙の中へ用なき書面は差控へねばならぬと存じながら一寸と筆をとります御寸暇の節御覽下されますならば結構でございます其の後私共皆樂しく暮し居ります御安心下さいませ、母事は先日より信州善光寺參詣の爲め家を留守にいたして居ります恰度小供が遠足にまゐるやうに樂しげに出かけました、あのやうに老も死も思はずお詣三昧に日を送ります老人はまづ幸福なのでございませうか、此の母の幸福を續けてあげるは自分の役目とばかり、今迄は先がけですゝめて居りましたが、舊道德の申す所謂親孝行のみではどうも不徹底な愛、との感が深うなりました、あてにされる私はもと露の身でございますゆゑにどうか一日も早く光による生活を確立したいと祈らずには居られませぬ母のみでなく、妹にも一子にも此の生活へ導くこそ、ほんとうの愛をつくすことになる、かくてこそ私も眞に落ちつかれると存じます、が日常自分自身が、まだ〳〵このやうな事ではと思ふ、ふしのみでございます、先生どうぞ此の祈のきかれますやう、此の願ひの成就しますやう、御導き下さいませ、一體、園生活と先生と別々に考へるべきでありませうけれども私は園生活＝宣光社とのみでは一つの概念になります、無論それは自分の實踐の未熟な爲めに違ひございませぬが、――私は、假りに先生なしと考へますと、たよりなくて自分が危くなつてきます、また迷ひはしまいかと――、割合に仕合せな外境をもちながら、何やらむ漠然と焦燥を感じて寺院に教會に圖書館に、十時間の勤めをもつ傍、殆ご休らふ間もない知識慾のあせりに研究し懷疑し、其の結果は身心をいためて、理窟ぽくなるのみ、何やらむ問題は未解決のまゝのやうな氣もちでありました、それが今日ではモウ理窟はあまり氣にならなくなりました、仰ぐべき師を發見した悦びで一ぱいです。

たゞ此の道をたゆまずまゐりませう、これで私は滿足でございます、もし岐路がみえたなら、先生のところへ伺ひにまゐる迄と思ふてゐます、先日先生のあとをお供して半日歩きまして以來、今まで自分にさへ判然せなんだ心の底の眞の祈がはつきりしてまゐりました、何も彼もまとまつてきました、自分だけの澄んだ氣もちがつゞきます從てまづ他に障りない日を送つて居ります、どうぞ私の爲めよろこんで被下ませ、一子の教育についても、人は教育による、後天的の教育が或る程度迄天性を左右するとの先生のお言葉に、私はしつかりとした希望をもつやうになりました、不敏不德の身迚も一子の教育すら覺束ないと思はれますが小供は拜んで育てよ、との先生の御一言を基調に、合掌の心もてお菓子と螺との扱ひ分けに苦心して居ります。――勉強せよと言ふ前にまづ自分が机を出して勉強をはじめます萬事斯樣にしてまゐりますと私自身隨分得るところがありまして、又三としても大分成績がよろしいやうでございます、何も彼も此の頃は靜かなよろこびに充ちてゐるやうに感じます。

林慶之亮氏、先生の御留守中のみ在園せられ、先生にま見えて間もなく歸京した事を、私は同氏の爲めに殘念に思ひました、それでさしづめ宿に差つかへて居られましたので、一燈園の方として道の上の友として、御都合よき迄手前共においで下さい、とて、其の後私共に滯留して居られます、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

私共女ばかりの家庭へお他人をおさめ申しても今迄とちがひ少しの不自然な點もなく單純に平和におつきあひのできますのは全く一燈園精神で人に對するからこそと思ひました、他に働きかける愛については、ほんとうに心せねばならぬ事、いかに奉仕の願ひが深うても、いろ／＼考へますと手も足も出なくなりますが、此の氣もちでゆけば＝物質や性別を超えた純な氣もちでゆけば他を傷けることなく、何分かの奉仕ができると一寸私には、よい證明になりました今夕林氏のいろ／＼な所感を聞きました、私も信仰の一端を話しました、林さんは言ふてくれます、あなたは惠まれたかたゞと私自身もさう思ひます、今迄の理窟は総を消しかくまで一筋になれますのはほんとうに天の惠みであると存じます。末ながら先生の御壯健をおいのりいたして居ります、長くなりまして御許し被下ませ（天香氏宛）

□山本道三兄（京都市外花園村字多野療養所）　御無沙汰いたして居りました。どうぞお許し下さいませ。先日の手紙にてのお願ひお聞きとゞけ下され十日朝早速お三方お越し下さいましてありがたうございました。昨二十日朝歸園なされる迄の十一日間の御托鉢によつて色々と一方ならぬお導きにあづかりました。患者一同に代り厚くお禮申上げます。おなれにならぬ始めての場所の故や、またかうした公立の病院の事故御豫期にそはなかつたり、色々と御困らせ申しました事は歸園なすつた方々より既に御承知の事と存じます。何とお詫び申してよいか分りません。自分が弱い病人であるためや、私もこの病院に御厄介になつてゐる身であるためや、又御覧下さいましたでせうがあの小さな病友雑誌の發行に熱中してゐた爲めなどゝ色々お申譯の口實もあるやうでございますが、考へて見ればそれもこれも皆私の至らぬためなのでございます私の罪でございます。事々に氣の利かぬ、世間なれぬ私は、いつもかうして人様に御迷惑ばかりかけてゐるのでございます。どうぞお許し下さいませ。

一燈園の方が歸られてから何だか寂しい氣がすると私の逢ふ病友は皆申してくれます園の方達の生死を越えた悠々とした態度、しかもすべての罪を自分の罪と自覺されての懺悔、奉仕の生活から來る丁寧と、謙虚と親切、それがやるせない寂しさと絶えず死を瞶めてをびえてゐる私達肺病人の眼にどんなにうつつたか、それは先生もお察しゝて下さるでせう。たとへまたそこまで行かなかつた方といへども、毎日毎日の單調さに變化を求めてやまぬ病院生活に、貧しい身なりの人達が、無報酬でどんな事でも喜んでやつて下さるのを見て何も考へずにゐられる事が出來ませうか。この度の御托鉢によつて播かれた種のやがて發芽し、成長して行くところに、この山の小さな病院が一家族のやうになつて心から――口だけでなく心から――慰さめ合ひ喜び合ひ、力になり合ひして行く美しい生活が始まつて來るのでございませう。そしてまたさうして行く事のみが、今私達が進むべき唯一つの道ではなからうかと思つてゐます。どうぞ時々はこの播かれた種に水も灌ぎに來て下さいまし、施肥もなすつて下さいよし、お願ひいたします。小さい私一身から申しましても、園の人がゐられるといふ事だけでも、ある力強さと、言ひ知れぬ慰さめと反省の心をいつも與へて頂いてゐた事を深い喜びを以てお禮申されねばなりません。まして、本や雑誌で知つてゐた生活の人々を目のあたりに見、親しく色々とその信念、感想を聞かせて頂いたといふ事は何といふ幸福でございませう。横道へ外れ通しの私も、これからは正しい道をしつかり歩んで行きます。どうぞお導き下さいませ。

托鉢にお越し下さいました、藤田様、武野様、海谷様、田中様に厚くお禮申上げます。どうぞお傳へ下さいまし。（天香氏宛）

大正十一年六月十四日印刷（代金二十錢）
大正十一年六月十五日發行（郵送料不要）
東京市牛込區原町三丁目五十三番地
編輯兼發行兼印刷人　中桐確太郎
東京市牛込區原町三丁目五十三番地
印刷所　株式會社一匡印刷所
發行所　東京宣光社
京都市柳ノ馬場町三條下ル　宣光社
振替大阪五九八三九番

文學博士 金子筑水序・平林初之輔著（新刊出來）

新學藝講座 第一編

科學概論

目次―第一章 科學的眞理―第二章 驗經―第三章 科學の目的―第四章 科學の分類―第五章 科學の方法―第六章 數學と自然科學―第七章 法則と假說―第八章 科學と文明―第九章 科學の價値―第十章 最近科學の概觀―第十一章 相對性原理。

定價金壹圓 送料金六錢

金子博士序 二十世紀新學藝の氣運は今や勃然として大いに起らんとする概がある。故に本講座は常に此の新興の氣運に注目し、凡て舊習舊慣を捨てて、專ら二十世紀新學藝の精神を解說し、咀嚼し、發揮せんことを根本方針とした。

平林氏緒言 本書の目的は、科學とは何ぞやと云ふ問題を一般讀書のために、出來る丈け平易に說明する事にある。私は最初或る一冊の書物を選んでそれを解說的に講述するのが最も安全だと思つたが、適當な書物もなく、且つ極めて難事業であり、就中平易と云ふ第一の目的が到底達せられない事を知つたので、大體に於て二三の書物によりつつ、參考し得るものは悉く參考した。

▽見よ！ 最新學藝の知識を大學の講堂及び專門家の研究室より一般知識階級に解放せんとして開設したる『新學藝講座』の第一編今や新裝して市場に出づ！

內容見本進呈 ・ 東京神田表神保町

春秋社

振替東京二四八六一 電話神田二一三八

大正十年八月五日第三種郵便物認可（每月一回十五日發行）

京都 東寺濟世病院長・ドクトル 小林參三郎著

生命の神秘

生きる力と醫術の合致

四六版 三百二十頁
着色版 一葉
凸版 十數葉
英國特製布表紙
定價 金貳圓
送料 金拾四錢

不治の難症に惱む者此新福音に聽け。科學を偏重して人間本具の生存力を無視せる現代醫學の缺陷を剔抉し、故岡田先生の遺業靜座法を醫術に應用して、幾多の患者を救濟せし新研究也。

▼本書の著者は永く英米獨にありて科學的醫術の蘊奧を極めたる人、嘗て自ら不治の難患に苦める時、一僧侶の法話を聽いて豁然大悟する所あり、幸にも偶々九死に一生を得て、生存力の秘密を躬自ら體驗し、玆に主客圓融、科學と宗敎との合致したる醫界 Epoch-making の療法を發見したり。後年故岡田先生につき靜座法を修得して益々所信を確かめ不治を宣せられし患者を再起せしめたる事數千人に及ぶ。而して衆望の歸する所、眞言宗東寺派の濟世病院に推されて長たる事十年也。

▼心身に憂ひ惱みある者、將に大手術を受けんとする者、不治の宣告を受けて生存の意義を見失へる者、速に本書を一讀せよ。生存力と醫術とを合致せしめ、靜座を基礎としたる新療法によりて、幾多不起の患者を全癒せしめし實驗談とその方法とは、極めて平明に解說さる。

目次

總論、本論、（一）神經衰弱症 （二）暗示暗示感覺自家暗示 （三）婦人科病、（四）慢性胃病、（五）心臟病、（六）思ひより身體に起る病、（七）肺結核、（八）近親者の看護は結果惡し、（九）腸の慢性疾患、（十）喘息、（十一）慢性腎臟病、（十二）蓄膿症、（十三）子宮筋腫、（十四）脫腸、（十五）泌尿症、（十六）子宮脫、（十七）痔瘻、結論、靜座法、

圖書目錄進呈

東京神田表神保町

春秋社

振替東京二四八六一
電話神田二一三八